



Title	『チャラカ本集』の哲学思想（一）
Author(s)	今西, 順吉
Citation	北海道大學文學部紀要, 19(4), 1-22
Issue Date	1971-03-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/33363
Type	departmental bulletin paper
File Information	19(4)_PR1-22.pdf



『チャラカ本集』の哲学思想(一)

今
西
順
吉

『チャラカ本集』の哲学思想(一)

今 西 順 吉

第一節 チャラカ本集

インドの医学は既に仏陀の時代に有名な医師ジークアカが存在していたことを記録に残している。それによれば、彼はタクシラに学び、ビンピサー王及び仏陀の侍医として盛名を馳せたと言われる。⁽¹⁾

その歴史はさらに古くアタルヴァ・ヴェーダにたどることが出来る。そして医学 (Ayurveda) ⁽²⁾ はアタルヴァ・ヴェーダの副支 upāṅga 又は副ヴェーダ upaveda とされ、⁽³⁾ 後には学問の体系の中にその地位を占める。

今日現存する医学書として最も古いものは『チャラカ本集』 Carakasamhitā 次いで『スシュルタ本集』 Suśruta-samhitā であるが、伝承によればチャラカ本集は元来神に由来し、そして Agnivesa が Atreya Punarvas ⁽⁴⁾ から聞き学んだものを Caraka がさらに改訂した。それ故本書の名称として コロフォンには Agniveśatantra と言つ。チャラ

『チャラカ本集』の哲学思想(一)

カは雜寶藏經卷七⁽⁵⁾によるとカニシユカ王の親友であつた三智人の一人(遮羅迦)であり、他は馬鳴菩薩と大臣の摩吒羅である。同様の記述は付法藏因緣傳卷五⁽⁶⁾にも見出される⁽⁷⁾。この伝承は他に確証を欠いているが、一般にはこれに従つてチャラカ本集の年代を一一世紀と想定している⁽⁸⁾。なお後代さらに附加がなされているので、本書の全体をこの時代に想定することは困難であるが、しかし哲學的な問題に關してはそれほど新しい時代に引き下げることは出来ないであらう⁽¹⁰⁾。そのことは本論においてふれるであらう。

本論文では次のテキストを参照した。

Sri Carakasamhitā with Cakrapāṇidattā's commentary Carakatātparyā or Āyurvedadīpikā. 2 vols. ed. by Narendranatha Śāstri. Motilal Banarsidas 1929.

Carakasamhitā with Hindi commentary Vidyotini by Kashi Natha Pandeya and Gorakh Natha Chaturvedi: 2 vols. Vidyābhavan Āyurveda Granthamālā 32. Vārāṇasi 1962.

Carakasamhitā with Cakrapāṇidattā's Āyurvedadīpikā and Gaṅgādhara's Jalpakalpataru. vol. 2. 1907.

Carakasamhitā with Hindi commentary by Jayadeva Vidyālaṅkāra. 2 vols. Vārāṇasi 1959.

これらは番号のつけ方に僅かながら相違があり、⁽¹¹⁾ここではCakrapāṇidatta(一一世紀の人)の注釈を参照する便宜上、第一のテキストを用いることとした。

注記

- (1) Rockhill: The Life of the Buddha. p.65; Filliozat: the classical Doctrine of Indian Medicine. Its origins and its Greek parallels. Delhi 1964. pp. 9 ~ 11. ditto: L'Inde classique, §1647. 赤沼智善: 印度固有各詞辭典, jīva-komārabhacca 及び Takkasila の項。A.K.Biswas: Science in India. Calcutta 1969. p. 4. なお, Basham: The Wonder that was India. London 1961. p. 164.
- (2) Weber: History of Indian Literature. pp. 265ff.; Winternitz: History of Indian Literature. vol. III. Delhi 1967 pp. 626 f. Filliozat, op. cit. pp. 1 ff. なお, シュル・ヴェーダのチャラカ派とチャラカ本集との関係について Vidyabhushana: History of Indian Logic. pp. 25-26. Filliozat. L'Inde classique, § 1621-3
- (3) 拙稿「竜樹によって言及されたサーンキヤ思想」(『北海道大学文学部紀要』XVI-2, 六二頁以下参照。
- (4) Filliozat, op. cit. pp. 2, 15. なお, チャラカ本集において ta-ntra は学問・論書の意味とされる。(āyurveda, śākha, vidyā, sūtra, jñāna, śāstra, lakṣaṇa を同義語とする。Car. I. 30. 28.
- (5) 大正四〇、四八四頁上。
- (6) 大正五〇、三二五中一三二七上。
- (7) Takakusu: A Record of the Buddhist Religion as practised in India and the Malay Archipelago, Delhi 1966, p. lix; Filliozat, op. cit. p. 17. ditto, L'Inde classique §1647. 金倉田照: 『印度中世精神史』中、一八六頁
- (8) 1st ~ 2nd c. Basham, op. cit. p. 164; Dasgupta, op. cit. vol. III. p. 517; 78A.D. 頃 Vidyabhushana, op. cit. p. 50; 100 A.D. Suali: Filosofia Indiana, p. 28. 一世紀中村元博士『イノト思想史』(第2版)一三四頁。但し Filliozat (op. cit. pp. 17-22) は前二一世紀とみる。
- (9) 第五篇 Cikitsāsthāna の第十五章以下は Dr̥ḍhabala が改訂している。Dr̥ḍhabala による附加は特にスシュルタ派の外科に関する知識であると言われる。Seal; Positive science of India p. 62
- (10) 懷疑的な見地からすれば Keith (History of Sanskrit Literature. pp. xxiii, 487, 488 note 2; Indian Logic and Atomism, p. 13) のように、本書を資料的意義なきものとする見解も起りうる。しかし内容的な検討から伴断するときは、そのようには言えないであらう。
- (11) Filliozat, op. cit. p. 22. Winternitz, op. cit. III, p. 632, 636; Kane: History of Dharmaśāstra. vol. 5. p. 1396; Seal, Positive Science of India. p. 66.

第二節 医学と哲学・仏教

医学 āyurveda は人間の寿命に関する学⁽¹⁾であり、健康を目的とするものである。しかしこの場合の健康には単に身体のみならず精神もまた大いに関係をもち、しかも単に精神病の問題としてより以上に、人間観・世界観⁽²⁾という根本問題にまでたどりつかねばならない。チャラカは人生の目的として四つの事柄(法・実利・愛欲・解脱)⁽³⁾を承認しているが、人間の行動の動機は一般に生命・財産・来世への欲求に見出されると説く。勿論かかる動機に発する行為が正しくあるためには誤った判断(prajñā-aparādha)を除かねばならないが、ともかく解脱あるいは来世という宗教的立場の承認を含みつつも、現実の世界における人間の営為を肯定的に把握している。従って医学の固有の立場は現実世界における人間の理法を追求することであり、ここに合理性を重んずる科学的視点が開けてくる。例えば狂気は神などがとりつくことから起ると考えられているが、その原因は誤った判断にある。それは結局は自己の業から起るの⁽⁴⁾であり、幸福も不幸も自己がつくるものに外ならない。⁽⁵⁾それ故いたずらに神々や父祖を非難すべきではなく、善⁽⁶⁾shreyaḥをもたらず道を歩み、神々を崇い、良きことnītaをつとめるべきである。⁽⁸⁾自己の主体性を確立し、その上で現実の状態でよって来る原因を追求すべきである。かかる合理主義的立場は伝統的な宗教的な立場と切り離しえないが、それが病氣治療に関しても、アタルヴァ・ウェーダ以来の呪文などの使用と、合理的・科学的な治療との併行⁽¹⁰⁾となつてい⁽⁷⁾る。そして合理的な因果関係の把握に対する関心は医学において根強いものとなっており、少なくとも後代では仏教

の四諦と同じ因果の把握が医学的連関におけるものとしてとらえられている。⁽¹¹⁾

⁽¹²⁾チャラカ本集はかかる関連から哲学・宗教に対しても強い関心を示している。その最も代表的な例として論理学の体系の紹介を挙げることが出来る。これは『方便心論』と共に最初期の論理学の体系を伝えるものとして重要な資料であるが、本書の学的関心によつて取り入れられたものであろう。⁽¹³⁾Tantrayuktiの採用もこれに準じて考え得よう。そしてこの系列に連るものとして、結果を生起せしめるための十種の条件を取り上げてみたい。これは論理学を説いた直後に述べられるのであるが、それは次のごとくである。⁽¹⁵⁾

一 原因 *karāṇa* 作るもの、*‘inheut’*、即ち作者 *karitṛ* (医師)

二 作具 *karāṇa* 作者が結果を生起せしめるために努力する際に補助となるもの (医薬)

三 結果の母胎 *kāryayoni* 変化して結果となるものもの (三要素の不均衡)

四 結果 *kārya* 作者がその生起を目指して行為するもの (三要素の平衡)

五 結果の果報 *kāryaphala* それを目的として結果の生起が望まれるもの (幸福の獲得)

六 随縛 *anubandha* 結果の後に結果から生じ、作者を必らず束縛する *anubadhnātī* 善或いは悪の状態 (寿命)

七 場所 *dēśa* よりどころ *adhiṣṭhāna* (地と苦)

八 時間 *kāla* 転変 *pariṇāma* (年及び苦の状態)

九 行動 *pravṛtti* 結果のための行為 (治療行為)

一〇 方便 *upāya* 原因等⁽¹⁶⁾の三(原因、作具、結果の母胎)の最善なること *saṁsihava* 及びそれらを正しく整えること。但し結果、結果の果報、随縛を除く。(その理由は) 結果を生起せしめるものなるが故に方便なのであって、結

果が作られてしまったならば方便の意義はない。また未生の結果は方便ではない。結果が作られた後に果報・果報の後に随縛が生ずる(故に両者も方便ではない。)⁽¹⁷⁾

右の十項目を述べた後に医学における適用を説く。それが右において括弧内に記したものである。その説き方から見て、この十項目もチャラカの独創ではないのである。バガヴァット・ギーターはサーンキヤ体系において五要素を説く、と述べて、依所 *adhiṣṭhāna* (身体) 行為者 *kartr* 各種の器官 *karāṇa* 各異の行動 *ceśā* 運命 *daiva* をあげている。⁽¹⁸⁾ これは行為成立の要因をあげたものである。⁽¹⁹⁾ しかし一般化して考えるならば、第五を除いて順次チャラカ本集の第七、一、二、九に相当する。けれどもチャラカ本集では結果などについて詳しいことが注意される。しかもその内容は、単なる客観的現象の成立を考察の対象としていたのではなくて、あくまでも人間の実践的連関を問題としている。インド思想における実践一般の問題は別の機会にとりあげたいが、チャラカ本集において特に注目されるのは第六項随縛及び第十項方便である。

まず随縛についてみるに、ここにおける用法に最も近い例はニヤーヤ派及び仏教に見出される。ニヤーヤ・スートラ三、二、六一は⁽²⁰⁾「(身体)が生起するのは前世において作られた(行為)の結果(＝法・非法 *Vatsyāna*)の持続作用にもとづく」(*pūrva-kṛta-phala-anubandhāt tad-utpattiḥ*)と言ひ「同四、一、五九には「負債・煩惱・活動の持続作用の故に解脱なし」(*ṛṇa-kṣesa-pravṛtṭy-anubandhād apavarga-abhāvaḥ*)と説く。これに近い用例は有部にも見られるが、俱舍論を例にとると、随眠の定義の一つに「随縛する」*anubadhnanti* をあげ、それを注して「數現起故名「随縛」」(*punah punah samukhībhāvad anubadhnanty ato nūṣayaḥ*)⁽²¹⁾と云う。

さらに方便 *upāya* は個々の手段・方法ではなくして、それらの適切な扱い、処理を意味している。これは特に仏教

で用いる方便に等しいと言つてよい。かかる関連からするとき、この十項目と仏教との關係が問題になつてくるのであるが、ここでわれわれは『妙法蓮華經』における「十如是」との類似性を検討せねばならない。

周知のように『妙法蓮華經』には「十如是」と言われるものがあり、それは次のごとくである。

『唯佛與佛乃能究盡諸法實相。所謂諸法如是相。如是性。如是體。如是力。如是作。如是因。如是緣。如是果。如是報。如是本末究竟等。』⁽²³⁾

法華經の異訳のうち『添品妙法蓮華經』は右と同様であるが、それは羅什訳に従つてゐることを示すものであらう。⁽²⁴⁾しかしながら梵本はこれと異り、世親の『法華論』及び恐らく『正法華經』も梵本と同じく、所謂「五種法」を述べてゐる。その部分のみの梵文及び法華論の訳文を示すならば

ye ca te dharmā yathā ca te dharmā yādīśās ca te dharmā yallakṣaṇās ca te dharmā yatsvabhāvas ca te dharmā⁽²⁵⁾ 『何等法、云何法、何似法、何相法、何體法』⁽²⁶⁾

この間の問題については本田義英博士以來考證がなされてゐるが、それによれば、十如是は羅什訳の特異性であるとともに、智度論の「九種法」をとり入れたものである。九種法とは

「復次一一法有九種。一者有體。二者各各有法。……三者諸法各有力。……四者諸法各自有因。五者諸法各自有緣。六者諸法各自有果。七者諸法各自有性。八者諸法各有限礙。九者諸法各各有開通方便。」⁽²⁸⁾

智度論はここでは差別相と諸法実相又は法性との問題を種々の角度から述べてゐる。その内容の一端を記せば、如と諸法実相とについて「聲聞法中觀諸法生滅相。是為如。滅一切諸觀得諸法実相⁽²⁹⁾」という經典を引用し、また「智慧分別推求已到如中從如入自性。如本末生、滅諸戲論。是名為法性⁽³⁰⁾」と述べてゐる。九種法はこのような文脈の中で説

かれるのであるが、九項目を述べた後に続いて次のように言う。

「諸法生時體及餘法凡有九事。知此法各有體法具足是名世間下如。

知此九法終歸變異盡滅是名中如。……是法非有非無非生非滅。滅諸觀法究竟清淨。是名上如。」⁽³¹⁾

ここに下如、中如、上如の三種が立てられているが、上如は諸法実相に相当すると考えてよい。そして下如、中如、上如の右のごとき性格から判断して、この三種は第九項開通方便と表裏する関係にあるものと解してよいのではあるまいか。しからば羅什訳法華經の本末究竟等は、智度論の言う上如としての究竟清淨に相当すると言うことが出来る。⁽³³⁾このように判断してよいならば、智度論の開通方便も十如の中の本末究竟等も、項目としてはチャラカ本集の方便として扱ってよいことになるであろう。

また限礙については智度論自体には説明がないので明らかでないが、しかし anubandha の訳語と見て問題はないであろう。⁽³⁵⁾なお卷三三には所作、力、因、縁、果、報を挙げているので、以上を表示すると次頁のごとく対応を求めらるであろう。⁽³⁴⁾

表のごとく、チャラカ本集の十項目全てが他の資料と完全に一致するのではないが、場所及び時の二項を除いてはほぼ対応を見出すことは注目される。そして十如などでチャラカ本集に対応しないものは、相、体、性など法の自体に関するものであつて、この考察は十項目中には含まれていない。このような事情であるから、共通の源泉からそれぞれ多少の変更を加えつつとり入れた、と推測することが妥当であろう。しかし前述のように仏教的色彩が濃いことは注意されねばならない。

確かにチャラカ本集の哲学思想にはサーンキヤ、ヴァイシェーシカなどの影響が大きい。⁽³⁶⁾そのことは後に詳しく検

討するが、しかし仏教の影響もまた無視しえない程に著しい。そのことも後にとりあげるが、ここでは二つのことを指摘しておきたい。一つは、先の因果論とも関係するが、理由、原因を意味する *hetu* の同義語として *nimitta*, *āyatana*, *kartṛ*, *kāraṇa*, *pratyaya*, *saṃutthāna*, *nidāna* ⁽³⁷⁾ を挙げている。この中で、*āyatana*, *pratyaya*, *saṃutthāna* はかなり特殊であり、そのうち前二者は特に仏教的である。第二点は教説を説く形式に関するもので、質問者は問を發して禪定に入り、定眼 *dhīyānacakṣus* ⁽³⁸⁾ をもって教説者を見る。次いで教説者は語り出すと ⁽³⁹⁾ 言う。また仙人達は聞き終った時に、アートルレーヤの言葉に同意し、歡喜した ⁽⁴⁰⁾ と述べている。後者は仏典にも類似の表現がしばしば見出されるが、⁽⁴¹⁾ 前者については丁度逆の関係で、仏陀が禪定から出て説法する、という大乘經典の形式を想起せしめ、これはまた法

智度論	十如	Car.
所作	作	pravṛtti
因	因	kāryayoni (or kāraṇa)
緣	緣	kāraṇa
果	果	kārya
報	報	kāryaphala
限礙		anubandha
開通方便	本末究竟等	upāya
力	相	deśa
	性	kāla
	体	
	力	
	性	

典⁽⁴²⁾においても踏襲されている。

注 記

- (1) Car. Sūtrasthāna 30.
- (2) dharma, artha, kāma, mokṣa. Car. I. 1. 15.
- (3) prāṇa, dhana, paraloka-eṣaṇā. Car. I 11. 3. Dasgupta, History of Indian Philosophy, vol. II. p. 405. なおこれは Brhadāraṇyaka Up (IV. 4. 22) に説く putra, vitta, loka-eṣaṇā に対応する。Surama Dasgupta : Development of Moral philosophy in India. Bomboy etc. 1961. p. 30.
- (4) Car. II. 7. 10-20.
- (5) Car. II. 7. 21.
- (6) id. 22.
- (7) id. 21.
- (8) id. 22.
- (9) id. 23.
- (10) daivavyapāśraya, yuktivyapāśraya, sattvavyapāśraya Car. III. 8. 87.
- (11) 例えば YS. II. 16, 17, 24-26. Vyāsa ad YS. II. 15. なお四諦的な形式は、この外にも Vātsyāyana ad NS. I. 1. 1. Vijnānab-hikṣu ad SS. I. 1. 1. Kane, op. cit. p. 1418. 宮坂哲勝『ニヤーヤ・バーンユヤの論理学』四七七頁参照。
- (12) Car. III. 8. 宇井伯壽博士『印度哲学研究』第一。

- (13) Dasgupta (History of Indian philosophy, vol. II. pp. 392 ff) は医学の中から論理学が誕生したと推測するが、『方便心論』の存在やマハーバーラタにおける hetuka (金倉圓照博士『宇井伯壽博士還暦記念論文集印度哲学と仏教の諸問題』一六三頁以下) などによって無理であろう。
- (14) Car. VIII. 12. 1111には三四項目を挙げるが、既に Kauṭilya : Arthaśāstra の卷末 (XV) に三三項目を有し、Suśrutasaṃhita, uttaratantra LXV にも三三項目を見出す。S. C. Vidyabhushana, op. cit. pp. 24-25. 但し Keith (History of Sanskrit Literature, p. xxiii note) は Ruben の主張 (Festgabe an Jacoby, s. 354-7) に従ってこれを Drdhabala の附加に帰している。
- (15) Car. III. 8. 8-13 (Vidyābhavan Āy. Gr. のテキストでは III. 8. 68-84) cp. Vidyabhushana, op. cit. p. 27.
- (16) テキストは方便をも含めるが、他の二本によってこれを除く。
- (17) Cakrapāṇidatta によって補足した。
- (18) Bhagavadgītā XVIII. 13-14.
- (19) 辻直四郎博士『ベガウアット・ギーター』一五〇頁参照。cp. Bhandarkar : Vaiṣṇavism, Śaivism and other minor religions, pp. 25, 27
- (20) ĀnSS. ed. による。

- (21) anubandha. Ruben: Fortwirkung (Die Nyāyasūtra's. Leipzig 1928. S. 93) Vatsyāyana: tat-phalasya-anubandha ātma-samavetasya-avasthānam
- (22) Abhidharmakośa, karikā V. 39. 及び p. 250 (ed. jain), Abhidharmakośavyākhyā, ed. Wogihara, p. 488, ll. 7-8. 冠導本俱舍論卷二十、十六丁右
- (23) 大正九、五頁下。
- (24) 坂本幸男教授「法華經の教理—特に十如是の解釈の変遷について—」(金倉圓照編『法華經の成立と発展』昭和四十五年、所収)二七八頁参照。
- (25) Saddharmapundarikasūtra, ed. Kern and Nanjo. p. 30.
- (26) 菩提流支訳、大正二六、四頁下。なお勤那摩提の訳も同文。大正二六、一四頁下。
- (27) 本田義英『佛典の内相と外相』(三五九—四一九頁)『法華經論』(三二二頁以下)
- (28) 智度論卷三十二、大二五、二九八頁下。
- (29) 同、二九八頁上。
- (30) 同、二九八頁下。なお「如本未生」の「未」は三本及び宮本に従う。大正藏經は末とする。国訳一切經、釈經論部第三卷、八頁、国訳大藏經第二卷、三七〇頁参照。
- (31) 同、二九八頁下。
- (32) なお菩薩地は衆生をして仏法に入らしめる方便として随順會通(anulomika)以下随機的なものの五種と、仏法そのものの宣説である究竟清淨(visuddha)の六種をたてる。(菩薩地持
- 經卷八、大正三〇、九三二頁以下、菩薩善戒經卷六、同、九九五頁中以下、瑜伽師地論卷四五、同、五四〇頁以下。Bodhisattvabhūmi, ed. Wogihara, pp. 264ff) 教化の方便として説かれる故に性格をやや異にするが、参照される。
- (33) 以上の解釈については紀野一義『法華經の探究』一〇〇頁以下参照。大野法道博士は、智度論の九種法は単に下如を説くものであるから、法華經の十如がそれによるとは言えないと主張される。これに対する本田博士の見解については、『佛典の内相と外相』三八九頁以下参照。しかし以上のように解しうるならば、右の論争の論点は解消するのではあるまいか。
- (34) 大正二五、三〇三頁上。
- (35) 法華文句には次のように比定する。各有法||如是作、各有障礙||如是相、各有果||如是果、如是報、各有開通方便||如是本末究竟等。そしてこの外は語の同一によって対応が明らかである、と言う。本田義英『佛典の内相と外相』三八二頁参照。
- (36) Suñi: Filosofia Indiana, p. 28. Keith: J.R.A.S. 1914, p. 1093 宮坂有勝教授「医書チャラカ本集に伝えるヴァイシエーシカ哲学説」(『密教文化』第六四、六五号、昭和三八年) Chakravartin: Origin and Development of the Sāṃkhya System of Thought. Calcutta Sanskrit Series, no. XXX. 1951. pp. 102-3.
- (37) Car. II. 1. 3.

『チャラカ本集』の哲学思想(一)

- (38) *Dasupita*, op.cit.vol. II, p. 395. 但 *āyatana* は *śāstra* 上.
Car. I.20. 3. (41) *Filozat*, op.cit. p.203. note. 1.
(39) *Car.* I. I. 15-17 (42) 中野義照師『ヤージュニャヴァルキヤ法典』二四〇頁参照。
(40) *Car.* I. 12.14. tad *īśayah sarva evānūre vācam* *Yājñavalkya*smṛti I, 2, III, 329-335.

第三節 Sārīrasthāna(1) の意図

(1) 八篇から成るチャラカ本集の第四篇 *Sarirasthāna* はその第一章において人間観或いは世界観を展開する。チャラカ本集の哲学説としては常にこの部分が注目されるが、(2) なお問題を残していると考えられる。

内容に入る前にこの章の構成について見ておきたい。まずはじめにアグニヴェーシャが質問を提出し、プナルヴァスガそれに⁽³⁾返答する、という形式をとっているが、質問ははじめにまとめて述べられ（第一——二二偈）、その数は二二とされる。そして解答は質問の順を追ってなされている故に、本章の構成を考える場合には、まず最初に質問の内容を検討しておく必要がある。左にそれを列記する。⁽⁴⁾

- 一 プルシヤ *purusa* は幾種の要素 *dhatu* に分析されるか。
- 二 プルシヤは何故原因 *kāraṇa* であるのか。
- 三 プルシヤの起源 *prabhava* は何か。
- 四 それは無知 *ajñā* であるか、知者 *jñā* であるか。

五 常住 *nitya* であるか、無常 *anitya* であるか。

六 原質 *prakṛti* とは何であるか。

七 開展物 *vikāra* とは何であるか。

八 プルシャの相 *linga* は何であるか。

アートマンは無活動、自立、支配者、一切にゆきわたり、遍在し、知田、傍観者である、とアートマン知者 *atmajña* は語るが、しからは、

九 無活動 *niśkṛīya* なるものがどうして欲せざる母胎のうちに生まれるのか。⁽⁵⁾

一 支配者 *vasin* であるならば、どうして強いて不快な状態 *bhava* に入るのか。

二 一切にゆきわたる *sarvagata* のにどうして一切の感受 *vedana* を感受しないのであるか。

三 遍在する *vibhu* のに何故山や壁によって遮られた対象を見ないのであるか。

四 知田 *kṣetrajña* と田 *kṣetra* の何れが先であるか。

五 (アートマン) 以外に存在しない故に何を傍観する *saksin* のであるか。

六 変化しないもの *avikāra* にどうして感受によって生ずる差別 *viśeṣa* があるのか。

七 一七一九、三種 (過去、現在、未来) の苦 *arta* のうち医師はいずれの感受を治療するのであるか。

八 感受の原因は何か。

九 依処 *adhiṣṭhāna* は何か。

一〇 全ての感受はどこにおいて残りなく滅するのか。

二三一切知 sarvaavid にして一切を捨て sarvasannyāsin 一切の結合を離れ sarvasamyoganiṣṭha | eka にして静寂 prāṣānta なる原素我 bhūtātman はいかなる相 linga によって知られるのか。

以上の問題提起に対して解答はそれぞれ次の偈において与えられている。⁽⁶⁾

一 (一四—三六) 二 (三七—五〇) 三 (五一—四) (五二—五六) 五 (五七—六〇) 六・七 (六一—六七) 八 (六八—七二) 九 (七三—七四) 一〇 (七五) 一一 (七六) 一二 (七七) 一三 (七八—七九) 一四 (八〇) 一五 (八一) 一六 (八二—八三) 一七—一九 (八四—九五) 二〇 (九六—一三三) 二一 (一三四) 二二 (一三五—一五二) 二三 (一五三—一五四)

そして第一五五偈が結句となって本章を終わっている。以上において第二、二〇、二二問と前節に述べた十項目との関係が推知されるが、質問の順序から見るととき、第一問—第五問までは、いかなる意味にせよプルシャについて論じ、第六—八は三基本原理を扱い、そのうちのプルシャについて第九—一六において詳論し、最後に苦の問題を第一七—二二において、そして第二三において解脱を扱うごとくに解せられる。その限りにおいては本章は人間存在の分折とその要素の考察、苦とその滅及び解脱という明らかに一つの思想体系としての構造を骨格として有していることになる。それ故本章の意図はかりにその具体的内容が種々の要素を含んでいるとしても、かかる思想構造をふまえて組織的に哲学を述べるところにある と言わなければならない。これは本章作者の意図として評価すべき性質のものである。ここに述べられた思想を成している要素個々が有する資料的意義とは別に、やはりチャラカ本集の思想として扱いうるものと言わねばならないであろう。⁽⁸⁾

そこで以下に本章の内容についての検討を行いたい。便宜上先述の本章の構成とは若干順序を変えて、次のよう

に考察してゆくこととしたい。

一 原理の体系。人間存在の原理的分析と検討（第一、六、七間に相当）

二 プルシャの問題（第二一五、八一―一六間に相当）

三 解脱（第二三間に相当）

四 苦とその滅（第一七―二二間に相当）

注記

(1) 医学書は一般に八篇から成るとされる。義浄も南海寄帰伝

巻三にそのことに言及している。金倉圓照『印度中世精神史

』中、一八八頁注二

(2) 初めて研究、紹介したのは Dasgupta, op. cit. vol. I, pp. 213―8 である。

(3) Car. W. I. 155.

(4) 番号は Vidyābhavan Āy. Gr. のテキスト p. 836 を参照した。

(5) yoni = jāti, Cakradatta.

(6) 以下については Cakradatta の注釈の対応箇所及び前注 (4)

の箇所を参照した。

(7) 特に第二問の kāraṇa は後に説くように karuṇ の意味であるとされるから、十項目の第一に合致する。

(8) Dasgupta をはじめとする従来の諸研究にはかかる観点が欠けていると思われる。この点で中村教授の本章に対する扱い方（宮本正尊編『大乘仏教の成立史的研究』一九三頁以下）は貴重な示唆を与えるものである。なお同教授の見解については後に再びふれる。

第四節 原理の体系

人間存在は諸要素に分析されることを次のように説いている。

『精神を第六とする空など（の五）要素がプルシャであると伝えられている。

『チャラカ本集』の哲学思想(一)

精神要素のみでもプルシャと称せられると伝えられている。』

『さらに要素を分析して(プルシャは)二四(要素)より成ると伝えられている。(二四要素とは)意、十器官、(五)対象、及び八要素から成る原質である。⁽¹⁾』

ここでは一、六要素から成るプルシャ、二、精神としてのプルシャ、三、二四要素から成るプルシャという三説が述べられている。このうち第一及び第三説におけるプルシャは *puruṣa* という語の一般的な用法としての「人間」を意味するが、これに反して第二説はサーンキヤなどにおける特殊な用法に対応している。

ところで第一説は五元素と精神との六要素から人間は成ることを説くのであるが、この思想はチャラカ本集の中でも諸処に説かれている。

pañcamahābhūtavikārasamudāyātmano garbhaś cetanādhātvaḥśiṭhānabhūtaḥ, sa hy asya śaśīno dhātur uktaḥ. Car. IV. 4. 6.

śaddhātavaḥ samudītaḥ. puruṣa iti śabdam labhante, tadyathā—pṛthivy āpas tejo vāyur ākāśam brahma cāvayaktam ity eta eva ca śaddhātavaḥ samudītaḥ puruṣa iti śabdam labhante. IV. 5. 5.

śarīraṃ nāma cetanādhīṣṭhānabhūtaṃ pañcamahābhūtavikārasamudāyātmanakaṃ samayogavahi. IV. 6. 4.

ところでチャラカ本集は人間あるいは病気の起源に関する諸説を述べる中で *Hiraṇyākṣa* の説として、同じ六要素説を述べている。そしてそれが *Sāṃkhyā* の説であると言っている。

Hiraṇyākṣas tu neṭy āha na hyātmā rasataḥ smṛtaḥ, nātīndriyaṃ manas santi rogāḥ śabdādījās tathā. śaddhātujas tu puruṣo rogāḥ śaddhātujās tathā, rāśiḥ śaddhātujas sāṃkhyair ādyaḥ saṃparikṛtitaḥ.

Car. I. 25. 14—15.

しかしながら Sāṃkhya の語の用例は本書において他にも存する。即ち仙人の名を列挙する中で Ātreya Gautamaḥ Sāṃkhyah とあり、⁽²⁾ 二つでは知者、賢者ほどの意味であろう。⁽³⁾ 同様に

sāṃkhyaiḥ sāṃkhyāta sāṃkhyeyaiḥ sahasīnam punarvasum. ⁽⁴⁾

においても医学に関して完全な知あるものの意味であろう。⁽⁵⁾ これに反して論理学に関する部分で

yathā ādityaḥ prakāśakas tathā sāmkyajñānam prakāśakam. ⁽⁶⁾

においては論理学書におけるサーンキヤ学派に対する言及の存する事実を思い合わせるならば、サーンキヤ学派を指していると考えることが可能であろう。⁽⁸⁾ またヨーガと対比して出されることがある。

āyanam punar ākhyātam etad yogasya yogibhiḥ, sāmkyātadharmaḥ sāmkyaiḥ ca muktair mokṣasya cāyanam. ⁽⁹⁾

sarvabhāvasvabhāvajño yayā bhavati niḥsprihaḥ, yogam yayā sādhyate sāmkyayā sampadyate yayā. ⁽¹⁰⁾

これはバガウッド・ギーターと類似の思想、表現であり、ギーターにおけるサーンキヤの意義に関してはなお問題が多いけれども、チャラカ本集における右の二例のうち少なくとも前者においては明らかにヴァイシェーシカ学派などの学派時代を扱っている部分に含まれているものであるから、学派としてのサーンキヤを指していると解してよいであろう。⁽¹²⁾

Sāṃkhya という語に右のような二義が存する以上、六要素説にかかわるサーンキヤは学派としてのそれではないと言わねばならない。元来六要素説は古くジャイナ教の文献にも言及があり、⁽¹³⁾ ヴァイシェーシカ学派の最初期の思想

と考えられるものである。⁽¹⁴⁾そしてチャラカ本集がこの六要素説を説いているのは医学的な概念としてそれを採用しているのである。このことをスシュルタサンヒターは明言している。『医学の定説においては……五元素と有身者（精神）との和合がプルシャである。この業我が医学において問題とされるのである。⁽¹⁶⁾』注釈者にかかる連関の上に立つて次のように言う。『この（六要素より成るプルシャ）はヴァイシェーシカ哲学によって採用され、医学の対象たるプルシャである⁽¹⁷⁾』

次に第三説における二四要素はサーンキヤ派において説かれる二四原理にほぼ相当する。その詳細は第六一・六一偈に説かれる通り、五元素及び思惟機能 (buddhi) 自我意識 ahaṅkāra 及び未顕現 avyakta⁽¹⁸⁾が八種の原質 prakṛti であり、五知覚器官、五作業器官、意、五対象 artha が一六の開展物である。その開展の順序は、未顕現—思惟機能—自我意識—五元素等である。かくて肢体を完備したときには生まれた、⁽¹⁹⁾と言われる。以上の二四原理の集合 rasai⁽²⁰⁾が人間である。それ故人間は諸原理の結合より成るものである。⁽²¹⁾

以上によって二四原理は明らかとなったが、未顕現は顕現となり、顕現は未顕現となる、⁽²²⁾という循環が人間の輪廻において起る。ところでここに未顕現とは思惟されえないもの acintya であるが、顕現はその反対である。⁽²³⁾前者は超感覚的 atindriya であって、証相によって把捉さるべきもの līṅagrahya であるが、後者は感覚的に知られうる、⁽²⁴⁾という違いがある。人間あるいは現象は無限定的なものと限定的なものとの間を往還する。

以上においては精神原理に相当するものが明らかに説かれていない。二四原理より成る人間について⁽²⁵⁾『以上、田が全て提示せられた。但し未顕現を除く。未顕現はこの田の知田である、と仙人達は知る。』⁽²⁵⁾これは二四原理を二三の田と一の知田とに分けることを意味する。田と知田という概念は叙事詩にも用いられてい

るが、田は二四原理から成るとせられる。⁽²⁶⁾ それに対してチャラカ本集では未顕現を別立し、これを知田と同一視する。しからは未顕現は精神的原理でなければならないが、この点については未顕現はアートマンであると言う。

『未顕現はアートマン、知田、永遠にして、遍在し不壊なるものである』⁽²⁷⁾

医学の立場から物質的原理に対して第六の精神的原理が立てられていたが、この二四原理説としては直接には精神的原理は立てられていなかった。しかしながら右のごとく見るならば未顕現はアートマンであって精神的原理に相当し、しかも他の二三原理を開展する、と解さねばならない。⁽²⁸⁾ なおこの問題に関して注釈者は古典サーンキヤの理解に立って、未顕現と精神とを共に未顕現と呼ぶのは未顕現即ち知覚しえないという共通性にもとづく、と解釈する。⁽²⁹⁾ そしてこの解釈の支持者もあるが、チャラカ本集では六要素説の部分においても、その精神的原理をやはり未顕現と呼んでおり、両者の同一視は動かし難いと考えられる。⁽³¹⁾

(一)の項未完)

注記

- (1) *khāḍyaś cetanāśaśthā dhātavaḥ puruṣaḥ smṛtaḥ, cet-anādhātur apy ekaḥ smṛtaḥ puruṣasamjñakāḥ*・Car. IV. 1. 14. *punaśca dhātubhedena caturviṃśatikāḥ smṛtaḥ, mano daśendriyāṇy arthaḥ, prakṛtiś caṣṭadhātukī*・15.
- (2) Car. I. 1. 8c.
- (3) Dasgupta, op.cit. vol. II. p. 394
- (4) Car. I. 13. 3
- (5) See Chakravartin, op.cit. p. 2 - 3
- (6) Car. III. 8. 6. 28 (Vyābhavaṇ Āy. 6. III. 8. 34)
- (7) 『方便心論』以来サーンキヤ派は論理學書において言及されてゐる。
- (8) 宇井博士はこの箇所を「数論の知」と訳しておられる。『印度哲學研究』第二、四三三頁。しかしChakravartinは「何でも知者の意味と解する。」op.cit. pp. 2 - 3
- (9) Car. IV. 1. 149
- (10) Car. IV. 5. 18
- (11) Kane, op.cit. p. 1378. Modi : Aksara, pp. 23ff. Edgerton

- The meaning of Sāmkhya and Yoga.AJP.XLV. (補注)
- (12) See Chakravartin, op.cit.p. 3
- (13) Sūtrakṛtāṅga 2.1.22. cf.I.1.15
- (14) Jacobi: Die Entwicklung der Gottesidee, S.41
- (15) See Filiozat, op.cit. pp.26-27
- (16) āyurvedaśāstrasiddhānteshv.....pañcamahābhūtaśarīris-
amavāyāḥ puruṣa iti, sa eva karmapuruṣaś cikitsādh-
ikṛtaḥ. Suśrutasaṃhitā, Śārīrasthāna 1.21(Kashi SS. 156)
Dasgupta. op.cit.vol. II. p.303, note. 4
- (17) ayaṃ ca vaiśeṣikadarśanaparigṛhītaḥ cikitsāśāstra-
viśayaḥ puruṣaḥ.Cakradatta ad Car. IV.1.14.p.533 なお彼
はスミエルトの文をも縦いて引用している。
- (18) Car. IV. 1.64
- (19) Car. IV. 1.65ab
- (20) caturviṃśaka ity eṣa rāṣiḥ puruṣasaṃjñakāḥ (Car. IV.
1.33ch)puruṣo rāṣisaṃjñas tu (id. 51c)
- (21) saṃyogapuruṣa, Car. IV. 1.83a.
- (22) Car. IV. 1.66a
- (23) Car. IV. 1.58cd
- (24) Car. IV. 1.60

- (25) iti kṣetram samuddiṣṭam sarvam. avyaktavarjitam,
avyaktam asya kṣetrasya kṣetrajñam ṛṣayo viduḥ. Car.
IV. 1.63.
- (26) 何べし Bhagavadgītā XIII. 5-6
- (27) avyaktam ātmā kṣetrajñāḥ śāśvato vibhur avyayaḥ.
Car. IV. 1.59ab
- (28) See Dasgupta, op.cit.I.p.214. Chakravartin, op.cit.pp.
101-2.
- (29) Cakradatta ad IV. 1.15. cf Dasgupta, op.cit.vol. I. p.213,
note 2.
- (30) K.B.R. Rao :The Sāmkhya philosophy in the Carakasa-
mhitā. The Adyar Library Bulletin, vol. XXVI, pts. 3-4.
1962. pp. 193-4.
- (31) cetanādhātuh.....sa hi hetuḥ kāraṇam nimittam akṣa-
ram kartā mantā veditā boddhā draṣṭā dhātā brahmā
viśvakarmā viśvarūpaḥ puruṣaḥ prabhavo'vyayo nityaḥ
guṇī grahaṇam pradhānam avyaktam jīvo jñāḥ pudgulaś
cetanāvān vibhur ātmā cendriyātmā cāntarātmā ceti.
Car. IV. 4.8 なお本文中に前に引用したIV.5.5ではbrahma
cāvyaktamと言っている。

(補注11) 塚本善祥「バガヴァット・ギーターにおける「Sāmkhya」の語義について」(『印仏研』第十九巻第一号一八頁以下) 参照。